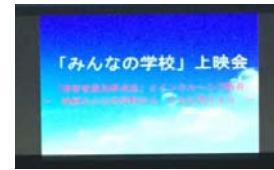


## 映画「みんなの学校」を観る

すべての子どもに居場所がある学校を作りたい—大空小学校がめざすのは、「不登校ゼロ」。ここでは、特別支援教育の対象となる発達障害がある子ども、自分の気持ちをうまくコントロールできない子ども、みんな同じ教室で学びます。ふつうの公立小学校ですが、開校から6年間、児童と教職員だけでなく、保護者や地域の人もしっしょになって、誰もが通い続けることができる学校を作りあげてきました。すぐに教室を飛び出してしまう子、つい友達に暴力をふるってしまう子も、ともに学びます。映画は、日々葛藤の中で生まれかわるように育っていく子供たちの奇跡の瞬間、ともに歩む教職員や保護者たちの苦悩、戸惑い、よろこび……。そのすべてをありのままに写していきます。そもそも学びとは何でしょう？そして、あるべき公教育の姿とは？大空小学校には、そのヒントが溢れています。みなさんも、映画上映で「学校参観」してみませんか？



上記は「みんなの学校」サイトから。1ヶ月ほど前に、映画に登場する大阪市立大空小学校の初代校長・木村泰子著『「みんなの学校」が教えてくれたこと 学び合いと育ち合いを見届けた3290日』を読んだ。教師の目から見た「みんなの学校」の取り組み、「すべての子どもの学習権を保障する学校をつくる」など多くの示唆を得た。本を読んで感動・感心したが、やはり映像のインパクトは違う。「映像はエイゾー」だ。運動会や卒業式のシーンなどで、なんども目頭が熱くなった。会場では、すすり泣きをする人も多かったという。

この映画は全国で話題となり、当地域でも各地で上映会が行われている。何度も見たという、シンポジウムで報告した一木玲子先生は今回、教師に焦点を当てて観たという。私も教師と生徒との悪戦苦闘、感動のシーンだけでなく、教師集団の「学校づくり」に注目した。教師が一人ではなく、教師同士の協働、「相互批判」と「助け合い」により、学校を運営している。とかく校長のリーダーシップばかり話題になり、大空小学校特有の事例と考えられがちだが、教師の集団としての取り組みは一般化できるのでないか。それと学校と地域社会、地域住民とのきめ細やかな交流にも感心した。それを生み出す、学校のホームページなど積極的な情報発信にも注目したい。

映画を観た感想として、厳しい意見も出された。学校のテストの時間に先生が障害のある生徒に「別室受験」を勧めたシーン。なぜ「別室受験」なのか校長らに問いたい。このシーンは席を外して見ていないが、学校のテスト、学力評価については教育とは何かを問う問題として考えていきたい。私が映画を観て感じたのは、障害のある生徒の変化だけでなく、障害のない生徒がどう変わったのかをもっと描いてほしかった。「障害のない子どもも変わる」というインクルーシブ教育の積極的な評価にも関わるからだ。

(2016年12月10日)